

伊那谷地名研究会通信

第46号

発行日 平成二六年二月二〇日
発行 伊那谷地名研究会
事務所 〒399-2102
長野県下伊那郡下條村陽阜七二〇八

「今、なぜ地名なのか」

伊那谷地名研究会 会長 原 董

今年「午年」
古代伊那谷は馬の一大生産地でその歴史・文化を伝えるが、今日馬の飼育はほとんど見かけない。
これは、下條村の中島論さんが長年飼われている木曾馬だが、その姿は、新野雪祭りの「競馬」に重なり、歴史が蘇る光景がある。



阿南町新野「雪祭り」の馬の芸能「競馬（きょうまん）」。

子供の成長、人びとの健康、作物の豊穰を祈る、室町時代から続く芸能文化として、「無形民俗文化財指定」。雪祭りを物語る「鬼さま街道」「庭」など人びとが日常語り合う地名がある。

(写真、南信州新聞社提供)

この近年特に言われている大事なテーマです。大切な地域を後世に伝えて行く地名が行政や地域の都合によって消えて行き、地域が見えなくなってきたり、その現実に対して問い掛ける、地域を見つめ直すテーマです。そうした、過去の事例を振りかえりまして、昭和四〇年代の中頃、高度経済成長のオイルショックによる不況から、「地域の見直し」活動が全国で言われ、その中で取り組まれたひとつが地域史への関心です。町村史の発刊が取上げられ、下伊那地域の町村誌もこのころから取り組み現在に繋がる、戦後の社会見直しの時代でした。

さらに大事な時代は昭和五七年当時です。「地域の見直し」が行政指導により、「地域教育、社会教育」活動が広められたことです。この背景は、戦後の経済発展の中で、自然や歴史・文化がなおざりになり、地域が人びとから忘れられ消えて行く現状を憂う研究者の視点が色濃くありました。が大事なことは、戦後の町村合併と「住居表示法」による地名の改廃から、地名の存続を長年訴え活動続けた、谷川健一先生により、昭和五六年四月、川崎市と神奈川県協賛で、「地名を通して『地方の時代』を考える全国シンポジウム」を川崎市で開催し、その一〇月に、「日本地名研究所」が川崎市に設立され、全国に地名研究会の発足と活動が発展した歴史の背景を忘れてはならないと思います。

それから三〇余年が経過しここに、「今、なぜ地名なのか」、が全国で取上げられています。要因のひとつに、東日本大震災で地域が壊滅状態となった現実も挙げられています。さらに、昭和四〇年代、五〇年代のような、歴史の繰り返しが人びとの地域の見直しに繋がり、「今、なぜ地名なのか」という問いかけであることを考えます。

地名を語り合うことで地域社会と人びとの生活が成り立っている、「地名は大地に刻まれた歴史の索引である。」という、谷川健一先生の言葉通り、伊那谷地名研究会の今後の方向を考えると、大事な視点を繋がるテーマと考えます。本年も会員皆さんの一層の活動とご協力をお願い申し上げます。

「下黒田東地名研究会の歩み

これまでの八年とこれから」

下黒田東地名研究会 中島 正韶

下黒田東地名研究会の西澤洵副会長・井坪隆事務局長のサポートを受け、発表致しました内容の概要と、当日配布資料の一つを紹介します。

1. 設立の動機

- (1) 下黒田東創立一〇年を経て、ここで生きて逝くのみならず「もっと、地域を知り地域をよくしたい」「地域や人づくりに繋がる何をしたたい」という思いや願いが醸成されていたこと。
- (2) 各々の専門分野におけるプロパーが、常に顔が見える近隣に存在し、地域の諸活動で繋がりが、地域の課題を共有していたこと。
- (3) 伊那谷地名研究会の活動による地名学への関心の高まりが直接の引き金になったこと。
- (4) 『上郷小字地図』(日下部地図)が小字地名への関心を強く引き起こしていたこと。

2. 組織の実際

(1) 研究会のあらまし

- ① 名称 下黒田東地名研究会 (略称「地名研」)
- ② 設立 平成一八年(二〇〇六) 四月一日
- ③ 会長 桜井重男 副 西澤洵 事務局長 井坪隆
- ④ 規約 1 特に定めなし

2 会費は、当面、徴収しない

3 会員の出入、出欠・遅刻早退は自由

- ⑤ 会員 二五人(二五年一二月一日現在)
- ⑥ 内容 テーマを掲げての懇話会・合同研究会グループ発表・個人発表・情報交換会
- ⑦ 留意 例会は二人以上の参加があれば開催する。アカデミック(学術的)な面を維持しながらも、非学術的に広く浅く、狭く深く語り合う。

狭い地域での緊密な人間関係が幾重にも絡みあうサークルは、④規約⑦留意のように自由気儘なスタイルが有効である(あった)と総括している。

(2) 例会・研究活動等の実際

① 例会資料を準備し、資料をもとに学びあい、研究課題を明確にする。② 資料学習や課題提起後は相互の発言で研究会が動いていく。③ 討議・情報交換・意見発表がテーマから離れても気にしないで深める。④ 「まとめ」より、次例会への課題やテーマを明確にする。⑤ 懇親交流会を持つ。当日の研究例会は短時とし、テーマを明確にして始める。⑥ 例会時以外の有志による随時の現地調査、古老等からの聴き取りなどを通して、会員相互の繋がりを育むよう努めよう。⑦ 課題意識や到達点を常に繰り返し確認し温めつつ研究活動を継続する。⑧ 地域研究団体との連携・交流・参加。

3. 研究活動の経過

(1) 年度別研究テーマ(主なもの抜粋)

① 下黒田東の小字の悉皆調査 ② 下東の石造文化財と地名・信仰地名 ③ 戦後誕生の新地名 ④ 汎称地名「あかばし」「あおばし」など ⑤ 地名から探る戦国飯沼城の縄張り ⑥ 江戸時代の道と地名 ⑦ 城郭地名 ⑧ 地名「桜畑」について ⑨ 最近誕生の新地名を考える ⑩ 下東の地名散歩・文化遺産 ⑪ 苗字と地名

(2) 主な研究発表の場・啓発的活動

文化展での発表・『広報しもひがし』コラム掲載・下黒田東歩こう会(地名を歩く会)・講演会・リーフレット配布・他団体依頼の講演や資料提供など。

4. 研究の成果と課題

(1) 地域での地名への興味関心・学びの広がり
(2) 研究会活動の継続と広がり
「地名「桜畑」を使おう!」の呼び掛けが地域自治組織名変更の提案へと展開している。(次頁)

5. 組織、及び運営の課題

(1) 運営について

この間の研究会スタイルを基本的には継承していく。更に広く近隣からも話題提供者を募り例会に参加を求める。研究テーマが練り上げられていないと、研究会が分解してしまう。研究会は、テーマ基礎資料を提示し、調査研究の課題を明らかにして臨みたい。参加者の、地域への課題(短中長期)と思いや願いに応える研究会でありたい。地名研究会の「地名」にこだわらない「地域総合研究会」として地域学としての視点も大切にしていきたい。

(2) 組織の維持・拡充について

「入退会自由」方式の気楽さが、会の継続と拡大、エネルギーを生み出している。会員募集や会員外の例会参加呼びかけは、会員の口コミを原則としながら更に工夫していきたい。地区内外の研究団体との連携をすすめるとともに、研究、及び研究会に関わる情報発信に努めたい。

6. まとめ

私たちの研究会は、忘却の地名を協働して発掘し、その地名を広め、次世代に伝えていく「地についた調査研究集団」であります。優れた研究者が、立派な地名レポートを発表しても、なかなか「読まない・読まれない」「その地域には、広がらない・伝わらない・残らない」「子どもにも伝わらない」のが実際であります。講演会や例会、地名コラムで発表するだけでなく、地域の人々と直接に繋がらない個人研究から、共同の研究へと私たちは一歩踏み出したのです。地元の生活者が、まさに共同研究者として関わることが、地域の子どもも含め、その地域にとって優れて有効な「地名の学び」なのであります。会員が協働して調査研究し結果を一緒にまとめ上げて発表する実践が「地名を残し活用する」営みに繋がっています。

下黒田東のみなさんへ（当日配布資料より）

地名「桜畑」をしよう！

下黒田東地名研究会

下東の地名を考える

私たち下黒田東地名研究会（会長桜井重男）は平成一八年に発足し、当地区の地名の掘り起しや地名由来と地域の歴史について研究調査をしております。皆さんがお住いの各々の地籍にも、そのほとんどに「地名」（小字）があり、過去に使われてきました。が、昨今、急速に忘れ去られ消滅の危機にさらされています。研究を進めるなかで当地区の広い範囲が古くから「さくらばた」と呼ばれていることから、あらためて「桜畑」の由来を探ってみることに致しました。

「さくらばた」の範囲

「下黒田東」でありながら、上郷内外で「さくらばた」と古くから呼ばれ親しまれている「桜畑」の範囲について考えてみました。

- (1) 古くはセンターから、東端は五味重機さん、南端は富起接骨院さん辺りを範囲とする小字（こあぎ）であった。
- (2) 一九三三年に「桜畑線」ができ「高陵」「立坂」を含む桜畑線周辺一帯の下東を「桜畑」と拡大して捉えるようになってきた。
- (3) 大明神原の桜畑線の新陸橋名が「桜畑橋」であり、桜畑線と相まって「桜畑」エリアが下黒田東の全域に広域化してきている。

地名の認知の傾向

「さくらばた」地名は、どのようにして広まってきたのでしょうか。

(1) 農道「桜畑線」の开通

昭和八（一九三三）年、上郷村における農道の第一号。先駆的な「桜畑農道」は注目をあび、「桜畑」は上郷全域に認知された。

(2) 高陵中学校の建設地

昭和二五（一九五〇）年、座光寺と上郷の「組合立高陵中学校」の建設と、その設立地として「桜畑」地名が飯田下伊那に知られた。

(3) 人気上昇の宅地開発

昭和三八（一九六三）年、町営水道の完備により、桜畑線沿いに住宅が建ち始め、飯田市の郊外住宅地として、人口増加率県下一の急上昇を示し「桜畑」の知名度も高まった。

地名「さくらばた」由来の諸説

(1) 「桜の木」由来説

段丘端に見事な桜・桜の美しい丘・飯沼城の桜の馬場などの由来説。（根拠薄弱な桜伝説）

(2) 「桜信仰地名」、「サ」「クラ」由来説

耕作の意の古語「さ」、神聖を意味する「さ」で早乙女・早苗の「さ」、「クラ」は、「座（くら・います）」の意で神のおわすところ。

(3) 「サク」+「ラ」+「ハタ」=「サク（柵）サク（割くる）」+「ハタ（畑）」説

○「サク」は開作開墾を示す「裂く」「割く」で「削」の意。※割くる（さくる）

○この大段丘上は、段丘下の飯沼住人の所有地が多く、段丘上端の雑木林を開墾し耕地（畑）を得ている。下段住人の段丘端（ハタ）の作物

場（サクバ）が「サクババタ」と呼ばれ、やがて「桜畑」と表記されるようになった。当会は(3)「サク（割くる）」+「ハタ（畑）」+「サクババタ」（作場畑）が「桜畑」に転化した説が有力である判断いたしました。

『桜畑』をしよう！

（地に着いた名称）は、その地に住む人々にとって地域の歴史・文化を受け継ぎ継ぐ大切なものであり、「地名は地域の重要文化財・地域遺産」であることの理解を、任んでいる地域で深めていきたいと願います。

そこで、私たちの「下黒田東」が設立後四半世紀（二五年度）を迎える節目にあたり、

「下黒田東」を『桜畑』と呼ぶことを提案するものであります。

地区の皆さまのご意見を賜りたく、ここに提案申し上げます。

『桜畑』が、この地区の大切な地名として地区の内外に親しまれて、次の世代に伝えることが出来れば幸いです。（25・10・19・文化展）



「桜畑」小字図（今村理則氏原図）

地名「桜畑」が小字Aから、☆印周辺へと下黒田東区を超えて拡大している。
（☆印・道路・鉄道・太字地名等は中島）

第12回 地名シンポジウム 開催（お知らせ）

下伊那の災害・地名は警告する

3月21日（金）午後1時 市美術博物館講堂

飯田市美術博物館の「遠山地震の資料展示」にあわせ美術博物館と共催で開催します。会員外の方に広く呼掛けお誘い合わせご参加の程お願い申し上げます。

日時 三月二日（金）午後一時

場所 飯田市美術博物館 講堂

テーマ 『下伊那の災害―地名は警告する―』

後援 飯田市教育委員会

開催趣旨

下伊那は自然豊かな一方で、数多くの災害に見舞われてきました。その一つひとつの地名には、災害の歴史が色濃く伝えられています。予想される南海トラフ地震を前に、災害地名をテーマに開催します。目的は地震・洪水・山津波・山くずれなどの現象を地名から探り、それらの成果を災害への備えとして後世に伝えることにあります。3・11東日本大震災の発生後、「今、なぜ地名なのか」をテーマにした研究が全国的に広がっています。ぜひ、多くの方の参加を賜り、地名のことも大切な意義を確認しあいたいと願って開催します。

研究会 発表者・発表テーマ

○「災害と地名・総論」 久保田賀津男さん

災害は生活と深く関わり、一般にマイナス面が強調されがちですが、伊那谷の地形は土石流や断層運動（地震）地滑り等により形成され、人々はその地形を利用して生活を営んできました。災害とは、生活に関わる場合のみに使われる名称で、災害を考える上での大前提であります。災害に関わる地名は、防災目的と災害後に生じたものがあり、36災で大崩落した大鹿村大西山の崩壊壁は、雨の度に崩れるので雨ナギと呼ばれ「降雨時は注意すべし」の意が込められています。天正地

震で平谷右岸が崩壊し出現した地震ダムは、後に「海」と呼ばれています。災害地名は、災害に対処すべく、人々が生み出した知恵の一つといえます。

○「天龍川周辺の災害地名」 今村 理則さん

天龍川やその支流の周辺に分布している自然災害に関わると思われる小字地名を挙げてみました。飯田市と下伊那の小字の全てに触れることができればよいのですが、そこまで調べが進んでいません。

そこで今シンポで上村・南信濃以外の飯田市の小字を中心にして纏めてみました。

○「遠山地域の災害地名」 針間 道夫さん

遠山の谷を走る世界的に有名な中央構造線は、古くから多くの地殻変動を繰り返してきました。また住民の生活を支えてきた森林資源は、何度も伐り尽くしたといわれますが、其の度に再生と荒廃はあったと思うが、保水機能を失った時の豪雨は、土石流を起し暴れる遠山川となつて災害を繰り返してきました。しかしながら、それらに由来する地名は意外と少ない。

今シンポでは、残されている地名を検証しながら、遠山の地形の変化と成立ちについて考えてみます。

○「暮らしの中で伝えられる災害地名」

寺岡 義治さん

「災害地名」も、その場所に当てられている漢字では「災害地名」として理解できない地名があります。その一例は、野底山森林公園内の「梅ヶ窪」は、地名の語源が不明でしたが、礫混じりの花崗岩が風化した山砂の竹林の土砂を深く掘削したところ、泥炭が出現したことから、「埋ヶ窪」と理解し、他方で語り継がれている「災害地名」によって、古代の大災害の調査が助けられた経緯があります。

○「プラネタリウム見学」遠山川の埋没林

○全体討論・まとめ

お知らせとお願い

□ 第7回「伊那谷の地名講座」開催

飯田市立中央図書館と共催

期日 四月一九日（土）午後（小雨決行）

テーマ「飯田の白山信仰地名の探訪」詳細後日

□ 平成二六年度 総会 開催（案内・予告）

期日 五月二四日 午後二時三〇分

会場 飯田市美術博物館 講堂（予定）

議事 事業・決算報告・二六年度事業・予算案他

記念講演 日本地名研究所所長代理・谷川彰英さん

□「地名コラム」掲載一〇年

さらなる継続へ・全会員の執筆を

南信州新聞「地名コラム」は、平成一七年一月開始から一〇年を迎え、月三回の掲載を継続し、三三〇回にとどく、飯伊地域の大切な連載に繋がっています。全会員の執筆をお願いします。

□ 第16回「伊研協シンポジウム」開催

日時 三月八日（土）午後二時三〇分

場所 飯田市美術博物館 講堂

テーマ「伊那谷の風土の多様性」

研究発表 テーマと発表者

○ 金属・鉱物の会 今村 理則さん（地名会員）

「伊那谷南部の鉱山・試掘跡」

○ 下伊那考古学会 小林 正春さん

「馬が紡いだ伊那谷の古墳文化」

○ ふるさと文学碑研究会 吉沢健さん（地名会員）

「飯田下伊那の文学碑について」

伊那谷地名研究会事務局

事務局 中島正昭 Ⅸ〇二六五（二四）〇一三三五

三九五一〇〇四 長野県飯田市上郷黒田一九七七

E-mail nakajimaya2@clock.ocn.ne.jp